別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者　元森絵里子

論文題目　「子ども」を語る社会の成立と変容　－近現代日本における子ども・教育・社会－

本論文は、明治以降の日本での「子ども」の教育をめぐる議論や活動の変遷を、一次資料(本や雑誌、未成年者の文書、参与観察など)から追跡することで、「子ども」の観念と教育制度がとり結ぶ独自の運動を描き出し、日本近現代における「子ども」とは何であったか、そして何でありつづけるのかを解明したものである。

論文本体は序章と第１～６章、および終章の８章で構成されている。

序章は論文全体の問題意識を述べ、既存研究との継承と相違を解説しながら、研究の視角と方法を示す。「子ども」の観念が歴史的に形成されたものであることは、Ｐ・アリエスなどの社会史や、教育学、社会学などですでによく知られている。それらを通じて私たちは「子ども」が造られたものだと知っているが、にもかかわらず、「子ども」があることを前提にして、教育をはじめとするさまざまな制度を運営しつづけている。

「子ども」の歴史性や非自明性を発見する研究は今も多いが、この点はほとんど看過されてきた。だからこそ、今も発見しつづけられているわけだが、それゆえに、「子ども」の社会性を問うには、この、「子ども」の虚構性を知りながらその外に出られないという事態にまず焦点をあてる必要がある。

その貴重な先行業績としては、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの教育システム論がある。ルーマンは「子ども」を、それが何かを問われつづけることによってコミュニケーションを継起させていくという意味でのメディアだと再定義し、このメディアとしての「子ども」を通じて自らを根拠づける制度として、近代の教育を位置づけた。そして、このような「子ども」の非自明性の制度化の一部として、教育が、「子ども」とされる側の観察をさらに観察する営みを組み込んでいる点にも着目したが、他方で、機能システムの分化と自律という発展段階図式をあてはめることで、理論面では教育と「子ども」を再自明化し、実証面では制度化の具体的な展開をうまくとらえられていない。

ルーマンの着想と限界をふまえ、本研究では教育の方法論や政策論の言説だけでなく、児童雑誌や生徒会誌、中学生新聞や遊びの場といった、子どもの観察(語り)を取り込む言説や制度の歴史的変遷も追跡していく。それによって、まず、日本近代の教

育における「子ども」の非自明性の制度化、そういう意味での外に出られなさそれ自体の多様性と推移を実証的に明らかにする。その上で、現代における「子ども」のあり方とその特性を位置づけ、日本近現代の「子ども」とは何かを探究する。

第１章以下では、具体的な資料にそって「子ども」と教育の変遷が時代ごとにたどられる。

第１章と第２章は非自明性の形成史にあたる。明治期以降、西欧近代との接触によって、日本でも教育制度が整備され、教育思想や方法論とともに「子ども」の観念も輸入された。発達の途上にある存在として、「子ども」は半ば透明な内面をもつとされ、「大人」はその「子ども」に連接しながら導く社会化エージェントとして位置づけられて、大人が「子ども」を大人化する機関としての学校ができあがる。

ところが制度の整備につれて、そんな教育活動が期待通りの成果をあげられないことも見出されてくる。大正期〜昭和初期の教育思想や児童雑誌や綴方教育の言説は、その原因を半ば透明な「子ども」の不透明な半分に求めて、そこを積極的に探求する営みとして教育を再解釈していった。こうして、「子ども」の観念にもとづく教育が「子ども」とは何かを探求するという循環、その意味で、「子ども」と教育が互いに互いを根拠づける循環ができていく。そして、この循環的閉域のもとで、「放任か強制か」の対立や、教育の権力性の発見などをともないながら、教育を通じてより良い「社会」を形成していくという思想も形成されていった。

1930 年代後半からの戦時体制下では、この循環が部分的に弱まるが、敗戦後は、改革で戦前の学校教育の多くが否定されることを通じて、あらためて再構築されていく。第３章では敗戦直後から 80 年代までの、政策論や教育学・教育社会学の文献、雑誌や書籍の教育論といった大人側の言説から、その転換と展開の過程をたどる。

戦後の教育改革を経た 1950 年代から 60 年代半ばまでは、経済成長や教育の量的拡大も背景にして、より良い未来へ「子ども」と社会がともに進歩するという図式がさかんに語られていた。より正しい「子ども」概念を前提とする教育が、より正しい方向へ「子ども」と社会を導きながら、その、より正しい「子ども」と社会とともに、さらにより正しい「子ども」概念を探求していく。そういう形で「子ども」と社会をより強く巻き込んで循環が再編され、教育の達成や社会の進歩への強い期待をあらためて掻きたてた。「子ども」と教育の循環は、むしろ戦後の高度成長期に最も強固に働いていたといえる。

しかし、高度成長が終わった 70 年代以降になると、社会を進歩させるという方向性は語られなくなる。教育論は教育自身のなかに根底的な「問題」をくり返し発見するようになり、より正しさへの信憑も次第に解体していった。

第４章では第３章とほぼ同時期、1950 年代半ば〜80 年代半ばの東京と山形の生徒会誌を使って、今度は子ども側の言説からその変遷をみていく。生徒会誌でも 60 年代半ばまでは、身の周りの後進性や歪みを指摘しつつ、より良い教育をうけた「子ども」と彼ら彼女らのつくる社会がより良い未来へ進歩するという形で、「子ども」と教育

と社会の関係が語られていた。学校は、より正しい「子ども」と社会の孵化器とされ、大人側の言説と図式を共有していた。

ところが 60 年代末には、現在の大人社会の不全という形で、現在の「子ども／大人」のちがいの方に強く焦点があてられるようになる。さらに 70 年代以降は、社会がとりあげられることもなくなり、「子ども」たちは大人とのちがいの内容を特定しないまま、大人とちがう存在として自らを語るようになる。学校はもっぱら「子ども」独自の文化や社会の空間として位置づけられる。

これはもはや「子ども」がいるから教育があるというより、教育があるから「子ども」がある状態に近い。だが、第 3 章でみた大人側だけでなく、子どもの側の言説でもそのことは発見されなかった。「子ども」と教育が互いを根拠づける循環は、循環自体を自明化したまま、「子ども」がより見えなくなったという大人側の不安を裏書きする方向へ逆回転していき、「子ども」の内実だけが語られなくなっていく。

第 5 章では 1983 年～2006 年の毎日中学生新聞の投書欄をもとに、その推移をたどる。投書欄の語りでは、80 年代には大人への準備期間としての自らの位置づけと「子ども」独自の社会への注目が並列していたが、90 年代には大人とのちがいがあまり言及されなくなり、「自分たち」などの言葉で、「子ども」でない外部を指示しないまま、自らを語る言説がふえてくる。

そこにはもはや「子ども」と教育の循環は見出せないが、循環が積極的に否定されたわけでもない。教育制度が期待外れや改革の失敗をくり返しながらも、そういう語りが子どもの観察として観察されることで、「子ども」は独自の領域としてありつづける。そこで消滅するのは「子ども」ではなく、「子ども」を定義する教育の専門家の特権性である。「子ども」とは何かは、日常的な実践と語りのなかでたえず発見されつづけ、大人とのちがいを線引き直されるようになる。

そんな現代の姿を、第 6 章では 2000 年代前半の世田谷区プレーパークの参与観察から描き出す。プレーパークの活動は、契約による免責や保険などの制度的手段を巧みに活用しながら、「子ども」が「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを追求する。それはヴォランティアによる試行錯誤という形で、「子ども」の定義の不在を、「大人」もふくむ全ての当事者の自己発見と自己成長の物語へ読み換えている。

現代では、法や経済、政治などの教育外の制度が、「子ども」の存在を組み込んで運営されている。それゆえ、教育によって根拠づけられなくても「子ども」はありつづけるが、だからこそ「子ども」らしさを現実化したいという欲望も抱かれつづける。プレーパークの活動はそのなかで、「子ども」の定義の不在を積極的に主題化することによって、新たな「子ども／大人」の定義づけのあり方を模索する営みだと考えられる。

終章では各章の議論をふり返りながら、そうした「子ども」の現代的位相を概括した上で、より妥当な「子ども」の語り方の可能性を展望する。

以上、述べたように、本論文は「子ども」をめぐる最新の理論社会学的研究をふま

えつつ、著者自身が収集した一次資料を用いて、日本近現代の「子ども」の観念と教育がとり結んできた独自の運動を解明している。

広い領域にわたる理論・実証両面での先端的な研究を吸収しつつ、著者自身の視点から再検討を加えることで、新たな知見が得られた点、そして、既存の文献や資料集によりかかることなく、多大な時間と労力を費やして一次資料を発掘・整理し、多くの興味ぶかい事実を発見した点は、それぞれ単独でも重要な学問的貢献である。本論文はそれらに加えてさらに、独創的な着想でその二つを有機的に結びつけ、日本近現代における「子ども」と教育に関して、示唆に富む全体像を提示することに成功している。とりわけ、その独特な閉じ、すなわち「子ども」観念の外に出られなさの多様性と重層性を具体的に描き出したことは、「子ども」をめぐる社会科学に新たな地平を開くものである。

他方で、残された課題もある。まず実証面では、資料の切れ目がしばしば時期の切れ目と重なる。「子ども」のあり方にともなって資料形態も変化するので、ある程度やむをえないが、変遷をもっと連続的に追跡できる資料をさらに探す必要があるだろう。また理論面では、「子ども」の現代的位相の考察が他の章に比べてうすい。例えば、著者が先行業績としたルーマンは、この点でも独自の考察を展開している。観察の観察という自省性をどう観察するかは、現代の社会科学全般の探究課題でもある。それらとの異同を通じて、著者の独創性をさらに明確にしていく必要があるだろう。

ただし、これらは部分的な疑問点であり、本論文の学術的な成果を損なうものではない。特に、学校制度の内外を横断しながら一次資料を自ら発掘した点、それにもとづいて「子ども」と教育が、非自明性の制度化という形で相互依存しながら、展開し変容していく過程を明らかにした点は、従来の教育学や社会学を超え出るものであり、制度横断的に社会を探求する相関社会科学にふさわしい業績である。

したがって、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。